

浙江省温州市近郊青田県の僑郷としての変容

—日本老華僑の僑郷からヨーロッパ新華僑の僑郷へ—

山下清海*・小木裕文**・張 貴民***・杜 国慶****

*筑波大学生命環境系, **立命館大学国際関係学部, ***愛媛大学教育学部, ****立教大学観光学部

中国では、多くの海外出稼ぎ者や移住者を送出した地域を「僑郷」とよんでいる。本研究では、浙江省の主要都市である温州市に隣接し、伝統的な僑郷であった青田県が、新華僑の送出により、僑郷としての特徴がいかに変容してきたかについて、現地調査に基づいて考察することを目的とした。

山間に位置し貧困であった青田県では、清朝末期には、特産品である青田石の加工品を販売するため、陸路でシベリアを経てヨーロッパに出稼ぎする者も少なくなかった。光緒年間(1875～1908年)には、ヨーロッパよりも日本へ出稼ぎに出る者が増加した。しかし、関東大震災の発生後、日本へ出稼ぎの流れは途絶え、青田人の主要な出国先は、ヨーロッパになっていった。

中国の改革開放政策の進展に伴い、海外渡航者が急増し、青田県では出国ブームが起こった。その主要な渡航先はスペイン、イタリアを中心とするヨーロッパであった。海外在住者からの送金・寄付・投資などにより、僑郷である青田県の経済は発展した。ヨーロッパ在住者やヨーロッパからの帰国者の影響は、僑郷の景観や住民のライフスタイルにも現れている。

キーワード：新華僑、老華僑、僑郷、浙江省、青田県、温州市

I はじめに

1. 研究課題

1978年末以降の改革開放政策の推進に伴い、中国では出稼ぎや留学などで世界各地へ出国する者が増加した。海外に在留する華僑(華人)は、大きく二つに分類することができる。改革開放以前から海外に在留している華僑が「老華僑」とよばれるのに対し、改革開放後に海外へ渡った華僑は「新華僑」とよばれる。中国では、新華僑に対して「中国新移民」とよばれることが多いが、本稿では、老華僑と新華僑を比較しながら考察するため、新華僑の用語を使うことにする。また、中国では海外に在留する中国系住民で、中国国籍を保留している者を華僑、中国以外の国籍の者を華人とよんでいるが、論の展開において両者を厳密に区別することは困難であるために、本稿では、両者をまとめて論じる際には華僑の用語を使うことにする。

中国では、多くの海外出稼ぎ者や移住者を送出した地域を「僑郷」(「華僑の故郷」という意味)とよんでいる。老華僑の主要な出身地は、福建・広東・海南など中国南部の各省の僑郷が中心であった(山下, 2002)。僑郷に関する先行研究については、山下ほか(2010)において検討した。筆者らの研究の関心は、老華僑の僑郷が、新華僑の増加により、どのように変容しているのかにある。すでに筆者らは、日本在留の華僑の主要な僑郷の一つである福建省北部の福清市(福州市に属する)を対象に、現地調査に基づいて、僑郷としての福清市の地域性、日本在留の福清市出身者と僑郷である福清市との相互関係などについて考察した(山下ほか, 2010)。

改革開放政策に伴い、伝統的な僑郷や上海などの沿海部大都市から海外に出ていく者が増加した。1980年代の半ば以降急増した新華僑の出身地をみると、伝統的な僑郷でない地域からも、しだいに多くの新華僑が送出されるようになってき

た。また、伝統的な僑郷においても、同郷人が多く居住している国や地域だけでなく、全く新しい渡航先もみられるようになってきている。そこで、本研究では、浙江省の主要都市である温州市に隣接し、伝統的な僑郷であった青田県が、新華僑の送出により、僑郷としての特色がいかに変容してきたかについて考察することを目的とする。

青田県を研究対象地域として選択した主な理由は、以下の2点である。すなわち第1点は、青田県が日本在留の老華僑の主要な僑郷の一つであったという点である。第2点は、青田県是老華僑の僑郷であるだけでなく、改革開放後、世界各地に多くの新華僑を送出している僑郷でもあるからである。青田県は日本の老華僑の僑郷としての特色だけでなく、ヨーロッパをはじめ世界各地に拡散していく新華僑の僑郷としての特色を表出しているという点で、僑郷に関する地理学的研究にとって重要な研究対象地域であるといえよう。

本研究の目的を達成するために、以下のような方法をとる。まず、青田県の伝統的な僑郷としての特色と背景について整理・検討する。次に、改革開放後の新華僑の送出、海外在留の青田県出身の新華僑と僑郷である青田県のつながりについて論じる。最後に、現地でのフィールドワークにもとづいて、青田県内の農村部および都市部の事例地域を取り上げ、特に僑郷の現況について分析する。

なお、青田県における現地調査は、2009年12月および2010年8月の2回実施した。その際、青田県人民政府僑務弁公室、青田県帰国華僑聯合会、青田華僑歴史陳列館、青田僑報社、郷・鎮の華僑関係団体などを訪問し、関係者からの聞き取り、資料収集などを行なうとともに、景観、土地利用調査などを実施した。また、筆者の一人である山下は、青田県出身者の海外での状況を把握するために、2010年11月にイタリア、2011年11月にはス

ペインで青田県出身者に関する調査を行なった。

2. 青田県華僑に関する先行研究

前述したように、僑郷に関する先行研究については、山下(2002)および山下ほか(2010)においてすでに検討した。ここでは、青田県出身の華僑や僑郷としての青田県に関する先行研究について整理・検討しておくことにする。

改革開放以降、海外へ出国した青田県出身者(以下、青田人とよぶ)の激増に伴い、青田県に関連する華僑や僑郷についての研究も増加した。1949年の中華人民共和国成立以前には、青田県華僑に関する単独の論文は皆無であり、年鑑、新聞記事、伝記、県誌などに青田県出身の老華僑に関する記述が散見されるだけであった。

僑郷としての青田県や新華僑に関する研究は、福建省の著名な僑郷である福州市や同市管轄の福清市の研究と比べると、その成果はきわめて少ない。そのような中で、中国華僑華人研究所の研究員である張秀明は、特に新華僑の研究に関して多くの成果を発表している。張(1998)は青田県出身の華僑の出国の要因や現状を考察したもので、青田県華僑に関する研究の先駆けとなる論文といえる。沿海部でなく内陸部に位置する青田県から多くの華僑が送出された要因として、青田県の特産品である青田石¹⁾との関連を張は指摘している。また張(2005)は、改革開放以降、激増する新華僑の出国状況と新華僑が青田県に及ぼす影響についても考察している。

もう一人、若手の研究者として、暨南大学華僑華人研究院の劉瑩の研究をあげることができる。劉(2009a)は浙南地域(浙江省南部地域)の青田県と温州市を中心とする海外移民の歴史の変遷を文献と現地調査に基づいて、青田人の海外送出の歴史や原因について考察している。また、劉(2009b)は、移民ネットワーク理論を用いて、送

出地の青田県の僑郷と移住先とを結びつける青田ネットワークの形成、特徴、変化、機能、発展の方向などを分析している。

浙江省で実施された研究としては、浙江省僑聯（帰国華僑聯合会）が浙江師範大学華僑華人研究センターと合同して出版した「華僑華人研究論叢」があげられる。本論叢は1995年に創刊され、不定期発行ながら2006年までに7輯が出版されている。その内容をみると、浙江省の海外移民の歴史や現状、新華僑の動向、著名な華僑人物の紹介、僑郷の変化、温州華僑などに関するものが多い。青田県の華僑に関する論文も掲載されており、先行研究として価値のあるものとなっている。以下、青田県華僑関連の主な論文としては、陳志望「青田華僑風俗談」（第1輯、1995）、周望林「青田石雕与青田華僑」（第2輯、1997）、周望林「浙南移民意識述論」（第3輯、1998）、周望林「試論浙南旅欧華人経済的發展演化」（第3輯、1998）、任幸芳「浙南僑郷の形成与發展」（第4輯、2000）、章志誠「温州人移居海外動因、特点及其歴史貢獻」（第4輯、2000）、麻卓民「旅居西班牙比利時的早期青田華僑」（第4輯、2000）、周望林「浙江僑史僑情概述」（第5輯、2001）、周望林・呉潮「三百年歴史 十八万赤子—海外青田人散論」（第5輯、2001）、史澄「青田中学校友出国述評」（第5輯、2001）、王燕「青田華僑和青田文化」（第6輯、2006）、郭秉強「青田人移民巴西及其創業史」（第7輯、2007）などがあげられる。

単著の学術書としては、呉（2003a）があげられる。本書では、海外に居住する100万の浙江省籍出身者の出国要因、浙江省籍出身者と僑郷との関係、僑郷の経済構造の変化などを分析し、地縁集団とりわけ青田県出身の海外移住者の歴史と發展を系統的に概括している。

また、徐（2008）は、辛亥革命期から1949年までの民国時代の浙江省出身の留学生を含めた華僑

の軌跡をヨーロッパ、日本を中心に辛亥革命、抗日戦争、第二次世界大戦、解放戦争との関わりの中から論述している。

『浙江華僑史』（周、2010）の著者である周望林（祖籍青田県）は、浙江省における華僑研究の中心的な研究者であり、青田県華僑研究の第一人者と言ってよい。本書は青田県華僑を含む浙江省出身の海外移民の歴史を古代、近代、現代へとその流れを概観し、浙江省華僑の経済事業、文化事業、社団、僑郷、新華僑の特徴などを論じている。

これらの研究をもとに周が主編の一人として関わり出版されたのが『青田華僑史』（《青田華僑史》編纂委員会編、2011）である。本書は、2011年7月に青田県で開催された世界青田華僑大会に合わせて出版されたものである。本書は青田県華僑の過去300年の歴史の發展と現況を系統的・体系的に理解できる貴重な資料である。また周は『浙江省華僑志』（《浙江省華僑史》編纂委員会編、2010）の編集にも主編として関わっている。

以上の主要な先行研究のほかに、以下の僑郷に関する文献も青田県華僑研究の手助けとなる。『方山郷志』（方山郷志編纂委員会編、2004）は方山郷の僑郷としての歴史、現況、社会構造の変化などを知ることができる。また、呉（2003b）からは、浙江省僑郷の社会変容、僑務事業、投資、僑郷の経済などが理解できる。『中国僑郷僑情調査』（喬・包、2010）の中の浙江省篇では、温州市、青田県の両地域の最新の状況が報告されている。

海外で活躍している青田人については、『風雲人物傳』（董編、1997）、『青田古人名人録』（留編、2005）、『緑都仁庄』（中共仁庄鎮委員会・仁庄鎮人民政府編、2008）、『華僑八典』（葉、2009）などが参考になる。

以上検討してきた先行研究から、広東省・福建章の沿海部とは異なる青田人の初期出国要因の特殊性が見出される。そのキーワードとなるの

は青田石であり、この特産品が貧困地域から人々を海外に送出する重要な要因となっている(李, 2002: 91-99)。青田県出身者の出国と僑郷の形成は、やがて隣接地である温州市に属する文成県、永嘉県、甌海区の麗蒼鎮、瑞安市の桂峰郷などにも波及し、地縁・血縁ネットワークと連動する形でこれらの山里の村々から海外への出国現象が起きたと捉えられる(周, 1997: 87)。民国期に形成された青田僑郷ネットワークは、とりわけヨーロッパとの青田僑郷ネットワークは、改革開放政策の進展による新華僑の大幅な増加によって、さらに重層的な拡がりをみせている(呉・周, 2001: 22)。

3. 僑郷としての青田県の基礎的特色

青田県は浙江省南部(浙南地域)の最大都市である温州市(人口912万, 2010年)の西に隣接する(図1)県の一つで、33の郷と鎮によって構成されている。1963年に温州市から麗水市に管轄

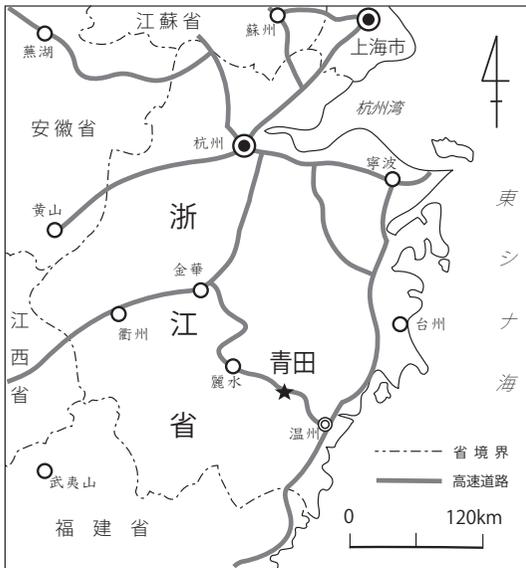


図1 青田県の位置

(筆者作成)

が変わったが、歴史的にも経済的にも隣接する温州市の影響を強く受け、温州都市圏に属しているといえる。温州市の中心部から青田県の中心部である鶴城鎮までは、金麗温高速道路で37km(温州西インターチェンジ—青田東インターチェンジ)で、車で1時間あまりである。青田県は、面積2,484km²、人口336,542人(2010年)で、そのうち56.9%は農村人口である(青田県人民政府「中国・青田」)。

次に、青田県の自然的特色についてみると、青田県は亜熱帯モンスーン気候に属し、湿潤温暖で四季は明瞭である。青田県気象台の観測によれば、年平均気温は海拔800m以上の山間部では14℃以下、海拔100m以下の河谷盆地では18℃以上である。無霜期間は年間279日間で、年降水量は1,400~2,100mmとなっている。気象条件からみれば豊かな農業地域になりうるが、地形の起伏が大きく、農地面積が狭く、農地に適した土地は狭い河谷盆地に限られ、山地斜面にある農地の土地生産は低い。農業基盤整備も徐々に進んできたが、依然として農家は厳しい生業環境におかれている(中国青田網)。

青田県は甌江(県内では大溪ともよばれる)の中流の山間部に位置している。甌江は青田県を下り温州市から東シナ海に入る。青田県の総面積のうち、山地が89.7%を占めて、平地が5.3%、水域(溪流塘庫)が5%で、耕地は総面積の5.3%にすぎず、まさに「九山半水半分田」(山地が9割、残りは水面と耕地が半々)と言われるほど山の多い地域である(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011: 1)。

唐の時代、711年に県制が設置されて以来、青田県の行政機関所在地は鶴城鎮に置かれてきた。中国では、県内最大の市街地は通常「県城」とよばれる。1196年になってから県城である鶴城鎮に瓦葺の家屋がやっと出現したことからその貧困状態を知ることができる。土地面積の90%近く

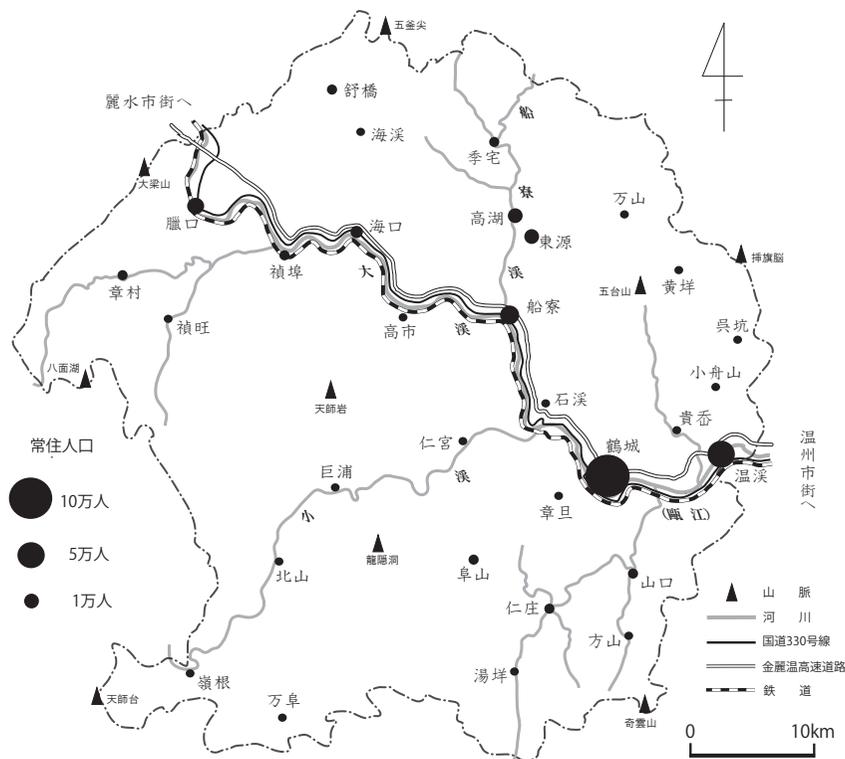


図2 青田県における人口分布(2010年)
(青田県統計局の青田県2010年第6回人口センサスにより筆者作成)

が山地で、大きな集落は河谷盆地に多く分布している(図2)。鶴城鎮(図3)をはじめ、温溪鎮などの郷鎮は甌江沿いに立地している。

青田県の出国者の多くは、甌江の南岸の山間集落から送出され、甌江の北岸から出国した者は少なかった。青田県内には、特に多数の出国者を送出した地区がいくつかある。山口鎮、方山郷、仁庄鎮、阜山郷などが、青田県内の中でも、特に僑郷として知られている。多くの地名に「山」が付いていることからわかるように、いずれも山間部に位置している。

アメリカ陸軍製図局が1960年に発行したCHINA25万分の1地形図²⁾ YUNGCHIA(永嘉)によれば、1940年代後半の地図には、甌江の河岸に“ferry”と表記されている所に船着き場があり、



図3 青田県の県城、鶴城鎮

中心を流れる甌江(手前が上流)の両岸に市街地が形成されている。甌江の左岸側が旧市街地、右岸側(写真手前)が新市街地。(2009年12月撮影)

聞き取りによれば、当時、舟運で温州までは半日くらいを要したという。今でも青田県の東部には温溪港があり、温州までの貨物輸送に船が利用されている。

II 青田人の海外出稼ぎの伝統

1. ヨーロッパへの出稼ぎ

青田県は、隣接する温州市とともに、海外出稼ぎ者を多く送出した僑郷として中国でもよく知られている。華僑研究においては、青田人と温州人は一つのグループとみなされることが多い。ヨーロッパやパリの華人社会を考察した李(2002: 570-571), Live(1998), および王(2000: 22, 30-37)も、「青田温州人」, 「温州青田人」, “Wenzhou and Qingtian migrants” という表現を用いて、青田人を温州人に含めて論じている。

青田人は、鉄道を利用しロシアを経て遠くヨーロッパまで青田石の加工品を担いで行商した。また、カバンの中にネクタイ、絹靴下、ネックレス、玩具などの商品を詰め、行商に従事する青田人が多かった。青田人はブラジルへの華僑移民の先駆けになっている(郭, 2007: 133)。ブラジルでは、青田人による「提包」とよばれる訪問販売形式の伝統的ビジネスがよく知られている(山下, 2007: 96)。

すでに述べたように、青田人の海外への出稼ぎは、青田県特産の青田石の加工品を海外で売り歩くことから始まった(図4)。清朝末期には、すでに陸路でシベリアを経由して、ロシア、イタリア、ドイツなどに渡った青田人が、青田石の加工品を販売していた。1950年代のデンマークの華人社会では、青田人が最大の集団であり、行商のほか骨董品店を経営する者が多かった(Thunø, 1998)。第一次世界大戦中の1917年、イギリスやフランスは不足する軍事労働力を補うために中国人(中国では「参戦華工」という)を中国国内で募集し、

多くの青田人もこれに応じ、終戦後、多数が現地に残留した(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011: 16)。ヨーロッパの伝統的な華僑社会においては浙江省出身者が多いが、なかでも青田人の割合は大きく、改革開放後の青田人の新華僑の増加の基礎は、同県出身のいわゆる老華僑が築いたものといえる。

1949年に中華人民共和国が成立する以前の青田人のヨーロッパへの主な移住先と人数は、以下のとおりである。フランス3,908人, ロシア1,902人, オランダ1,900人, ドイツ1,888人, イタリア1,671人となっている。そのほか、オーストリア480人, ポーランド94人, スペイン90人, ベルギー74人, ポルトガル72人, イギリス57人, チェコ56人, ハンガリー54人, ユーゴ50人, ルクセンブルグ45人, ブルガリア44人, ルーマニア38人, デンマーク30人, スウェーデン24人の順であり、最多時には3万人に達していた(呉, 2003b: 311)。

青田とヨーロッパを結ぶネットワークは、中国の改革開放以降、新華僑の増加によって拡大発展した。1990年代末以降、青田県からの出国ブーム



図4 中国石雕城

青田石の産出の中心地である山口鎮には、青田石の加工品を販売する店舗を集めた「中国石雕城」(「城」は都市・町の意味)があり、青田県の重要な観光名所ともなっている。(青田県山口鎮, 2010年8月撮影)

が急激に高まり、2000年にはその数が3万人の大台に達した(呉・周, 2001: 22)。現在、海外在留の青田人は世界120あまりの国・地域に拡がり、その数も3万人に至っている。海外の青田人が組織した団体は、ヨーロッパを中心にアメリカ、アフリカ、アジアなどに分布し、その数は253団体あまりで、青田県の各僑郷を結ぶネットワークの主要な柱となっている(青田修訂版編委会編, 2010: 265)。

2. 日本への出稼ぎの増加

清朝末期の光緒年間(1875～1908年)には、青田県からの出国者は、ヨーロッパよりも日本に多く渡っている(章, 2000: 78)。

日本における青田人の歴史については、あまり研究が行なわれておらず、ここでは、I章で紹介した研究成果に依拠しながら論を展開する。日本へ青田人が初めて渡来したのは、青田県山口鎮の『留氏宗譜』の記載によると、1797年(嘉慶2)といわれている。さらに、1825～1836年に、現在の方山郷、山口鎮、温溪鎮、章旦郷の四つの郷・鎮出身者12人が日本に渡ったという(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011: 68-82)。

当時、日本は江戸時代であり、長崎の出島に清国の貿易商人とともに来日したものと思われる。1877年に横浜と上海との間に定期航路が開設されると、浙江省から日本への渡来者も急速に増加した。1905年、3人の青田人が清国政府の官費留学生として日本に留学した。第一次世界大戦後から1920年代初期までは、青田県と隣接する温州市の瑞安市、永嘉県(図5)の山村から農民や手工業者が次々と地縁・血縁を頼って来日し、肉體労働に従事したり、青田石の加工品や日傘などの行商を行なった。この時期の日本在留の青田人の中では、方山郷、仁庄鎮、山口鎮などの出身者が多かった。その数は5,000人以上に達した。

そのうち温州市の永嘉県出身者は1,000人であった。1921年には、東京において中華民国僑日労働同胞共済会が設立され、3,000人あまりの温州人および青田人が参加した。また、1923年には、青田人も加わって浙江温州旅日同郷会が設立された。1943年には、静岡に居住する青田人、周銀昌、徐建一などによって、静岡県華僑総会が創立された。第二次世界大戦後は青田人も参加して、留日華僑浙江同郷会(1968年、東京)、日本華僑温州同郷会(1987年、川崎)が設立されている(《浙江省華僑志》編纂委員会編, 2010: 175-176)。

では、なぜ青田において日本への出稼ぎブームが起きたのであろうか。当時、青田および温州に属する瑞安・永嘉の山村は極端に貧しかったことが大きなpush要因としてあげられる。また、当時の日本は第一次世界大戦による経済特需により、多くの安価な労働力を必要としたことが、pull要因の一つになった。そして、一衣帯水という日本までの距離の近さや船賃の安さも、日本への出稼ぎブームに拍車をかけた(《青田華僑史》編

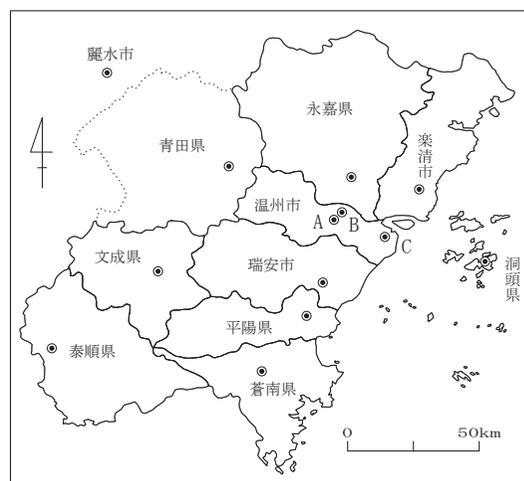


図5 温州市の行政区域と青田県(2012年)

実線は温州市の範囲。A, B, Cはそれぞれ温州市区部の甌海区、鹿城区および竜湾区を示す。

青田県は、麗水市に属している。

纂委員会編, 2011 : 68)。

青田人は来日後、しだいに工場などで単純労働に従事するようになった。青田人は東京に多く居住したが、関東大震災(1923年)および直後の混乱時の日本人自警団らによる虐殺により(仁木, 1991 ; 今井, 1993), 青田人122人が犠牲となった(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011 : 73)。

日本人により惨殺された青田人の居住地をみると、現在の東京都江東区大島、亀戸、荒川区三河島および横浜市神奈川区子安の付近に多かった(仁木編, 2008 : 625-663)。1920年代の東京における中国人の就業と居住について考察した阿部(1999 : 35-36)も、温州府出身者が「北豊島郡南千住町・三河島町と南葛飾郡大島町に集中し」、「これらの地区は、建設・運搬労働者も多く居住しており、やはり温州府出身者がそのほとんどを占めている」と述べている。

また、関東大震災で被災した青田・温州の出身者約2,000人が日本政府によって中国に強制送還されたという(周, 2010 : 57-58)。そのため、日本に残留した青田・温州の出身者は少数にとどまった。この関東大震災を機に、青田から日本への出稼ぎの流れは衰退し、海外出稼ぎ者の多くはヨーロッパへと向かうことになり、日本と青田とのネットワークは弱体化し、今日に至っている。

関東大震災の後、再来日した者を含めて、1949年の中華人民共和国成立以前の在日青田人は3,000人あまりとなった(呉, 2003b : 312)。彼らの多くは建設現場や工場の労働者として働いた。過酷な労働であったが、中国の中学教員よりも稼ぎは多かった。彼らの中で体の弱い者や少年たちが、青田石の加工品、温州製の日傘、雑貨などを売り歩いた。

関東大震災前に来日した青田人の中に、現在の仁庄鎮羅溪出身で裸一貫から身を起こし、中国料理店、遊技場店などの経営で大成功し、「旅日愛

国華僑」とよばれた林三漁がいる。林三漁(1902~1987年)は17歳の時に来日し、日雇い労働者や皮革工場の職人などをして蓄えた資金をもとに、第二次世界大戦後の混乱期にビジネス発展のチャンスを得た。また、東京華僑総会の理事や旅日華僑浙江同郷会(1946年創立)副会長を務めた。自分自身十分な教育を受けられなかった林三漁は、祖国の発展に強い関心を寄せ、とりわけ学校教育の発展事業に対して、多額の寄付を行なった。羅溪小学校、青田華僑中学、温州華僑中学、青田中学、温州大学などへの寄付ばかりか、故郷の村道、橋梁、発電所、華僑飯店などの建設、『青田県志』の編集にも資金援助を行ない、その総額は200万元以上にも達するといわれる(図6)。林三漁は、1961年以降訪中を繰り返し、その数は40回以上にも及んだ(中共仁庄鎮委員会・仁庄鎮人民政府編, 2008 : 40-45 ; 《青田華僑史》編纂委員会編, 2011 : 73 ; 留編, 2005 : 359-361)。

林三漁と同じく仁庄鎮馮垌村出身の11人兄弟姉妹の長男であった王仕福(1901~1985年)も生活苦から故郷の村を離れ、22歳の時来日し、様々な肉体労働をして生計を立てた。関東大震災の後、



図6 林三漁愛国学校

林三漁が1970年代初めに故郷に建設した羅溪小学校。後に「林三漁愛国学校」に改名された。

(青田県仁庄鎮羅溪, 2010年8月撮影)

強制送還されたが、3年後再来日し、工事現場などで働いた。やがて、日本人の妻を娶り、日本に定住した（鈴木、1999：40-45；《青田華僑史》編纂委員会編、2011：73-74）。その後、夫婦でラーメン店「五十番」（東京都墨田区押上）を経営しながら、長男の王鉄城を医者に、そして二男の王貞治を野球の名選手に育て上げたことでも知られている。王貞治は巨人軍の入団契約金を父仕福にプレゼントし、王仕福は初めての帰郷の際に故郷の馮垱村に水力発電設備を寄付した。王仕福の帰郷は6回にとどまったが、林三漁と同様、故郷に対する様々な寄付を行なっている。さらに、1978年には、生前墓である「王公墓」を生まれ故郷である馮垱村の山間の小高い丘に作った（図7）。2010年8月の筆者らの現地調査では、その墓石に、「鉄城」（長男）および「貞治」の名前が刻印されているのが確認された。

筆者らによる仁庄鎮の現地調査では、王仕福の知名度は林三漁に比べてあまり高くない。これは、中国において野球（中国語では「棒球」）が馴染みの少ないスポーツであることも一因となっている。王仕福については、日本のメディアにおいて



図7 王仕福が生前に作った「王公墓」
（青田県仁庄鎮馮垱村、2010年8月撮影）

もしばしば取り上げられている。王仕福が1985年8月に83歳で死去した際の記事では、王仕福について次のように報じられた。「中国・浙江省生まれ。大正11年ごろ来日、苦勞して当時の東京・向島に中国料理店を開業。次男の王監督や長男で医師の鉄城氏（王クリニック所長）らを日本人の登美さんと育てた」（朝日新聞1985年8月26日朝刊、「王仕福氏死去 巨人軍・王監督の父」）。また、王仕福の妻、登美が108歳で死去した際には、「富山市で生まれた登美さんは、10代半ばで東京に奉公に出て、中国出身の王仕福さんと出会う。差別の中、どんな仕事もいとわぬ出稼ぎ労働者だった。若夫婦は、屋号ごと継いだ下町の中華そば屋『五十番』に将来を賭けた」（朝日新聞2010年8月20日朝刊、「天声人語」巨星育てた108歳）。

Ⅲ 改革開放後の新華僑の増加と僑郷とのつながり

1. 新華僑の増加

1949年に中華人民共和国が成立し、社会主義政策が実施されると、中国から海外への出稼ぎは途絶えてしまった。しかし、1978年末以降の改革開放政策の進展に伴い、1980年代半ば以降、海外へ出ていく新華僑が増加した。

表1に示したように、2003年時点で海外在留の青田人は世界124カ国・地域に分布している。世界における青田人の分布の最大の特徴は、全体の87.5%がヨーロッパに集中していることである。ヨーロッパでは、スペインが50,000人で最も多く（図8）、以下、イタリア42,000人、フランス15,000人、ドイツ13,000人、オランダ12,000人、オーストリア11,000人の順となっている。アジアの中では、日本の1,200人が最も多く、以下、カンボジア800人、ミャンマー、タイがともに300人となっている。南北アメリカをみると、ブラジルが10,000人で最も多く、アメリカ9,000人、フランス領ギアナ1,500、カナダ600人が続く（《青田華僑

表1 海外在留青田人の分布 (2003年)

州	国・地域数	人口(人)	割合(%)
アジア	35	3,900	1.7
ヨーロッパ	35	197,020	87.5
アフリカ	27	1,665	0.7
オセアニア	4	225	0.1
北アメリカ	11	9,730	4.3
南アメリカ	12	12,565	5.6
合計	124	225,105	100.0

(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011: 97)



図8 バルセロナの青田人経営の中国料理店
窓ガラスには「青田 點心店」(「點心」=軽食)と書かれている。周辺の居住者には青田人が多い。

(FOND 地区のチャイナタウン, 2011年11月撮影)

史》編纂委員会編, 2011: 97-102)。

2009年12月に青田県僑務弁公室での聞き取りによれば、改革開放後の青田人の出国先としてはヨーロッパが多く、特にスペインが増加したが、2008年以降の経済不況に伴い、スペイン、イタリア、フランスなどでは、中国人に対する入国審査が厳格になってきたため、それらの国々への出国者は少なくなってきているとのことであった。

新華僑の増加に伴い、青田県では出国準備のために外国語を学ぶための学校が設立された。その存在は、僑郷らしい青田県の景観的特色にもなっている。青田県の県城である鶴城鎮には、外国語

学校が数校あるが、筆者らの調べによると、ほとんどのものは「外語培训学校」と名付けられ、小規模な外国語会話教室といった様相であった。

2010年8月、鶴城鎮の中心部、龍津路のある外語培训学校を訪ね、校長(女性)から聞き取りを行った。同教室はマンションの2階にあり、校長の自宅を兼ねている。広さ6畳ほどの教室が2つあり、リビングルーム兼事務室とその奥に寝室がある。学校のスタッフは教員と事務員あわせて4人で、専任教員は浙江省教育学院の元外国語教員であった校長のみである。同校の目的はヨーロッパ渡航予定者に簡単な日常会話程度の外国語を教えることにある。ヨーロッパに渡った青田人の多くは比較的単純労働に従事し、また青田人のコミュニティ内で生活する者が多いため、渡航初期には高度な外国語能力は必要ないと校長の説明であった。

そのため、この外国語教室に来た学生は、まず15~30日間の授業を受けて語学の基本を学ぶ。それからテキストとCDを使って自分で勉強する形をとっている。外国語の学習期間は人によってかなり異なる。極端な例では、出国のわずか1ヵ月前に勉強しに来る学生もいる。校長は速効法で教えているので、2時間あれば一般の人でもイタリア語の発音の基礎を身につけることができるといふ。毎月の授業料は2008年に350元、2009年に

500円、2010年に600円（2010年当時、1円＝約13円）へ値上げされてきたが、外国語学校の増加に伴い学校間の競争が激しくなったため、授業料の値上げは極力抑えているとのことであった。

2008年以前はイタリア語の学生で教室は満員の状態であったが、その後イタリア語学習者は減少し、毎月7～8人ぐらい、多い時で10人程度である。スペイン語の学習者は月に4～5人であった。2010年の調査時、同校において外国語別に学習者数が多い順にみていくと、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、英語、ポルトガル語、フランス語の順であった。最近では東ヨーロッパへ渡航する者が少しずつ増加してきたため、ポーランド語などの需要も高まっており、校長自身も、最近ポーランド語を勉強し始め、近いうちにポーランド語も教える予定という。鶴城鎮では、最近、イタリアをはじめヨーロッパから帰国した者が外国語教室を開くようになり、教授レベルの低い外国語学校が乱立していると校長は嘆いていた。

同校長によれば、青田県における外国語教育は非常に盛んで、その歴史は1970年代までに遡ることができるという。青田県阜山郷出身の林中平という人物の存在が重要であり、林は西ドイツから帰国した華僑であった。帰国後、上海で教育関係の仕事に従事したが、1958年に右派として投獄され、1970年代に青田県に帰郷し外国語教育の仕事をした。林は青田県における民間外国語教育の先駆者の一人であり、2007年10月に死去するまで青田県の外国語教育に大きな貢献をした。

現在ある青田県の外国語学校の特徴としては、他地域に比べ学校数が多いこと、学校の規模（学生数）が数人から十数人程度と小さいこと、教えられている外国語の種類が多いこと、在学期間が1週間から1ヵ月程度と短期間であること、小中学生向けの土日コースが設けられていることなどがあげられる。同校長の息子は2002～2003年頃

にスペインに渡り、3、4年後に新婦をスペインに呼び寄せ、現在は小さな商店を営んでいる。なお、妻の親戚もスペインに在留している。このように青田人の出国者のほとんどは、血縁者から援助を受け、就労・親類訪問・留学などの目的でビザを取得して渡航している。

2. 新華僑と僑郷とのつながり

(1) 僑郷への経済的影響

海外に在留する華僑が僑郷に与える経済的影響としては、送金、寄付、投資などがあげられる。中国銀行青田支店によると、2000年における海外からの送金総額は1.2億米ドルである。青田県僑務弁公室の統計では、2001年7月末まで、華僑が青田に投資した総額は3.2億元である（高・呉、2002）。表2は、青田県における外貨送金額と国内総生産の比較を示したものである。2000年以降、青田人の出国が活発化し、海外在留の青田人による青田県への送金額が急増してきた。2001年から2005年までの5年間で、国内総生産が2.5倍になったのに対し、外貨送金額は4.6倍と大きく増加した。青田県の経済力には、国内総生産より海外からの送金が大きな貢献をしている。外貨送金額と国内総生産の比率において、2001年には89.4：100で国内総生産が高かったが、2003年には状況が逆転し、さらに2005年には166.1：100と海外送金額が国内総生産を大きく上回った。

表3は、青田県における小売売上総額と住民の預金残高の推移を示したものである。長い間、住民の預金残高より小売売上総額の方が多かったが、1995年以降、住民の預金残高が小売売上総額を上回るようになった。上述の国内総生産と海外からの送金額の変化を考えれば、青田県の住民の預金残高を著しく上昇させた要因として、海外の青田人による送金を指摘することができる。海外からの外貨送金は、県民の消費活動を大きく刺激

表2 青田県における外貨送金額と国内総生産の比較(2001～2005年)

年	外貨送金額(万円)	国内総生産(万円)	比率
1950	1.9		
1955	18.6		
1960	33.9		
1965	116		
1970	126		
1975	186		
1980	428		
1986	989		
2001	179,200	200,460	89.4
2002	214,600	251,413	85.4
2003	452,800	330,315	137.1
2004	656,800	417,400	157.4
2005	826,400	497,474	166.1

注：1. 比例は国内総生産を100として計算した外貨送金額のものである。

2. 1950～1986年の統計は青田県誌編纂委員会(1990：665)、2001～2005年の統計は青田華僑史編写組(2007：285)によるものである。

表3 青田県における小売と住民預金の比較(1955～2009年)

年	小売上総額(万円)	住民の預金残高(万円)
1955	561	9
1960	1,774	75
1965	1,350	86
1970	1,705	151
1975	2,313	340
1980	4,635	1,080
1985	10,885	3,650
1990	20,754	13,952
1995	67,535	70,128
2000	104,234	144,078
2005	199,277	631,292
2009	363,773	1,599,852

(《青田華僑史》編纂委員会編、2011：303-304)

したともいえよう。

海外在留の青田人による青田県の家族・親類等への送金額だけでなく、故郷の発展や住民の生活

向上のために寄付する額も年々増加している(表4)。

海外の華僑が出身地にもたらす最初の効果は、海外で稼いだ資金を出身地にいる親族に送金することであるが、華僑が経済的成功をおさめるにつれ、出身地への経済的な還元は送金から寄付へ、さらに投資へと変わっていく。受益者も親族から出身地の住民全体へと変化していく。2001年以来、青田県政府は、海外の青田人の人的資源と投資が出身地である青田県に還元されるような優遇政策、すなわち「華僑要素回流工程」(華僑資源回流プロジェクト：華僑要素とは華僑の資金・人材・科学技術・文化などをさす)を実施してきた。青田県は、海外の青田人の経済力を青田県発展の原動力として位置づけている(張、2005)。

1990年代に入り、中国では市場経済が発展し、海外の青田人にもさらなる発展の機会を与えた(張、2005)。2000～2005年の間に、海外の青田人による青田県に対する投資額は15億元にも及び、

表4 青田華僑による寄付金額一覧
(1960～1987年)

年	金額(元)	年	金額(元)
1960	1,400	1979	31,928
1965	38,494	1980	121,960
1966	18,068	1981	124,856
1971	308,073	1982	173,769
1972	13,761	1983	94,759
1973	2,829	1984	171,642
1974	1,025	1985	272,600
1975	500	1986	550,000
1976	5,500	1987	610,000
1978	33,600	合計	2,574,764

(青田県誌編纂委員会, 1990: 653)

青田県の経済に大きな活力を与えた。海外の青田人の投資はホテル、飲食、金融、保険、観光など多岐の分野に及んだ(任, 2005)。

2002年以來、海外華僑は不動産業に大量の資金を投入するようになった。2001年から2008年の間、青田県の不動産開発投資額は64億元に及んだが、そのうち50億元近くは海外在留の華僑によるものであった。市街地面積がわずか2.1km²、常住人口58,000人にすぎない青田県城である鶴城鎮には、11軒もの不動産会社があり、その大部分は華僑資本の企業である(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011: 142)。海外在留の青田人の投資は、不動産への投資が目立ち、購入したマンションには青田県に住む父母に住まわせる場合も多い。また、中国料理店、西洋料理店、カフェなどの飲食業への投資も少なくない。しかし、青田県には資源が乏しく、また平坦地も限られているため、華僑の工業への投資は少ない。

1990年代以降、多くの新華僑が海外で成功を遂げるのに伴い、中国の華僑戦略も「僑資」(華僑からの送金または投資)よりも「僑智」(華僑のノウハウ)を誘致するような戦略に転換してきた。華

僑の資源を有効に活用するため、中国は華僑の経済力を活かす「僑資回流」(華僑の資金を中国に還元する)から「僑企投資」(華僑が中国で起業し投資する)へ、さらに「僑智回流」(華僑のノウハウを母国で生かす)へと、海外華僑に対する戦略を時代に合わせて変えている(曹, 2009)。

(2) 僑郷の都市発展への影響

海外の華僑が僑郷に与える影響は経済的な側面に止まらない。夏・王(2010)は、華僑が僑郷にもたらす効果を資金、人材、科学技術、および文化の4種にまとめた。丘(2007)はグローバル化を背景に、華僑の海外への進出による「智力流失」(brain drain)は、「智力流動」(brain circulation)によって「智力獲得」(brain gain)になりうると指摘する。

上述の通り、華僑の僑郷への影響は、特に都市発展に顕著に反映される。張(2010)によると、華僑の投資が都市の近代化を促進した注目すべき例として、福建省の厦門^{アモイ}を挙げている。厦門の都市建設は主に1927～32年に行われ、約1,330万元が費やされたが、そのうちの約70%は華僑の投資によるものであった。特に、不動産業においては華僑の投資が総額の65.17%を占めた。当時、厦門の市街地の建物の半数以上は華僑が所有していた。

青田県においても、厦門と同様に青田県の都市発展にも華僑の影響が反映されている。海外の青田人からの寄付金は、出身地である郷や鎮に対するものが多いものの、県城である鶴城鎮の中心市街地に、海外在留の青田人の寄付金によって建設されたものが多い。

1965年には、青田県僑聯弁公大樓(ビル)(建築面積808.5m²)が完成し、華僑とのコミュニケーションが強化された。そして、1980年代に入ると、都市景観に対する意識が向上するとともに、市民

の余暇活動や教育への需要も高まり、寄付対象としてホテルの華僑飯店(建築面積4,200㎡, 1984年5月開業), 太鶴公園(1985年完成), 青田中学講堂(建築面積900㎡, 1986年6月完成), 中山中学(1986年完成), 夏康体育館(1995年完成)など公共またはサービス施設があげられる(青田県誌編纂委員会, 1990: 654)。これらの公共施設に対する寄付においては, 前述した日本在留の青田人, 林三漁の貢献が大きい。その後, 甌江大橋と太鶴大橋などのインフラ整備にもそれぞれ300万円と200万円を寄付し, 鶴城鎮の市街地は大きく変容した。市街地が甌江南岸に拡大されるにつれ, 青田駅前広場(図9)の近くには, 海外の青田人の寄付金により青田華僑歴史陳列館が建設され, 青田県出身の華僑の歴史と文化を展示している(高・呉, 2002)。

2008年の世界金融危機以降, 海外に在留していた青田人が帰郷して起業する例が増えてきた。ニューヨーク市都市計画局長を務めたことのある青田県籍の建築家, 饒及人は招聘され, 「欧陸風情, 山水家園」というテーマの青田県都市計画に携わった(瀋, 2009)。



図9 青田華僑広場

左奥の建物は青田駅, 右端の旗は意大利(イタリア)青田同郷総会, 法国(フランス)浙江商会など世界各地の青田人関係の団体旗が揚げられている。

(2009年12月撮影)

(3) 僑郷への社会文化的影響

海外の青田人と僑郷である青田県とのつながりが強まるのに伴い, 海外の青田人を通して, ヨーロッパ文化が青田県へ導入された。すでに述べたように2008年の世界金融危機以降, 海外の青田人が帰郷して起業する例が増えたが, 彼らの起業は資金を僑郷に導入した投資面の影響だけではなく, 海外での生活と教育で蓄積してきた経験を生かしたノウハウは, 青田県の社会文化面にも大きな影響を与えている。

海外から帰国した青田人は, 青田県の住民がヨーロッパの飲食や文化に対して抱いている好奇心と憧れを察知し, 多数の西洋レストランを開店した。その影響で, デザート, パン, ステーキなどの西洋的な食文化が青田県の住民のライフスタイルに取り入れられるようになってきた。

青田県の中心部である鶴城鎮には100軒を超える西洋レストラン, カフェ, バーなどがあり, このような西洋式飲食店が増加するにつれ, 競争原理によりメニューの定価もしだいに低下し, 青田県の地元住民も消費できるようになってきた(郭・陳, 2009: 51)。

鶴城鎮の繁華街である臨江路には30軒あまりの西洋レストラン, バー, カフェが集中し, ヨーロッパのライフスタイルとレジャー文化が反映されている。臨江路の西洋式飲食店の利用者は, 以前はほとんど帰国した華僑であったが, 今日では, 利用者のお大半が地元住民に変わった。コーヒーを飲む習慣も青田県の地元住民の間で広がり定着している(郭・陳, 2009)。

IV 僑郷の地域的変容

海外在留の華僑は, 居住地においてホスト社会の影響を受けながら生活することになるが, 彼らの海外での生活様式は, 海外の居住地と僑郷との地縁・血縁的なつながりによって, 僑郷に対して

経済面だけでなく社会文化面においても大きな影響を及ぼすことになる。そのような影響は、今日の青田県においては、景観や住民のライフスタイルに認められ、他の都市とは異なる僑郷としての特色が明瞭である。本章では、農村部と都市部に分けて、僑郷としての青田県の近年の変容について事例に沿って考察していくことにする。

1. 農村部の変容

(1) 農業と生活の変容

青田県の農村部においても、イタリアやスペインから帰国した者や、出国の準備をしている者が多く、海外からの帰国者や海外在留の青田人の留守家族などによる住宅建設が各地で見られる。

青田県は山がちな地形に制約され、農村部には大きな集落がなく、ほとんどの集落は山間部の小さな盆地や緩やかな山地斜面に分布している。また、農業も振るわず、伝統的に自給自足的な農業を営んできた。このように農業の人口支持力が小さいことは、青田人が海外に渡った主要な要因の一つである。

青田県農業局のウェブサイト「青田農業信息网」によれば、青田県の総人口498,648人(2009年末)の83.4%は農業人口である。耕地面積は17万ムー(1ha = 15ムー)で、そのうち水田が14.6万ムー、畑が2.4万ムーである。農業人口1人あたりの耕地面積はわずか0.385ムー(約2.56a)である。1人あたりの耕地面積が、中国において相対的に低い浙江省の平均(3.6a/人)よりも、青田県のそれはかなり少ない(浙江省人民政府「浙江省可持续发展规划纲要2006-03-20」)。

青田県では、野菜、果物、茶などの栽培や「田魚」³⁾とよばれる水田での魚養殖などは、ある程度の生産をあげてきた。楊梅(ヤマモモ)、椪柑(ポンカン)、茶、楊梅酒、田魚干(水田で養殖された魚の乾物)なども青田県の重要な特産品となって

いる(青田農業信息网)。2009年の主な農作物の作付面積は、食糧作物13,512ha、果樹9,597ha(うち楊梅4,926ha)、野菜4,249ha、茶園711haなどとなっている。さらに特筆すべきことは、近年、「農家楽」⁴⁾や「漁家楽」などの農村観光が著しく発展したことである(図10)。青田県名産の田魚料理を目当てに、自家用車で遠くから観光客が来ている。青田県では農家楽の収入は633万円に達した(青田県年鑑2009年)。

「青田年鑑2009年」によれば、2009年の農業総生産額は7.4億元(うち、農業4.92億元、林業0.78億元、牧畜業1.14億元、漁業0.47億元、農林牧漁サービス業0.09億元)であり、青田県のGDP(94.17億元)に占める農業生産額も7.86%にすぎない。農業人口の割合からみれば、農業の地位はきわめて低いといえる。これは海外からの送金に依存する僑郷農村に共通する特徴である。僑郷では海外からの送金や海外から帰国した人たちによる建築ブームが起こっている。ただし、青田県の建築は地形条件の制約を受けて、また地域の住文化の影響もあり、筆者らが調査した福建省北部の僑郷である福清市でみられるような豪華な高層の「別荘」⁵⁾形式の住宅を建てるような建築事情とは異なっている(山下ほか, 2010)。新築された建物の多くは、ヨーロッパ様式の影響を受けている



図10 石積み古民家を利用した漁家楽
(青田県方山郷竜現村, 2010年8月撮影)

が、福清市で見られたような豪華な作りとは異なり、青田県の地元の石材が用いられており、伝統的な家屋景観とも調和しているようにみえる。

青田県の農村では、ほとんどの農家は、海外在留の家族や親類がいる。若年者が海外へ流出したため、農村では高齢者と子供の姿が目立つ。高齢者の世話や「留守児童」⁶⁾の教育は、重要な社会問題となっている。方山郷竜現村では、留守児童のために、「関心下一代工作協会」(次世代を見守る協会)が設立され、子どもたちの成長を見守っている。

僑郷の農村集落では、海外の青田人からの寄付で造られた診療所や高齢者用の活動室、幼稚園などが充実している。例えば、方山郷竜現村老年人協会活動センターでは、高齢者は高齢者用の活動室でテレビを見たり、中国将棋を指したり、談笑したりして過ごす。中国の他地域の過疎農山村に比べると、僑郷の老人はより快適な日々を過ごしている。このような状況は、僑郷特有の海外在住同郷者からの豊富な送金や寄付があるからである。

(2) 阜山郷の事例

阜山郷は青田県の南部に位置している(図2参照)。2005年10月の統計によれば、阜山郷出身の海外華僑は約8,800人にのぼり、主にイタリア、スペイン、フランス、ブラジルなど57カ国に分布している。現在でも、毎年1,000人以上が出国しているという(青田人文風情)。

阜山郷には宋の時代に建立された清真禪寺があり、年間20万人の信者が訪れており、浙江省南部ではよく知られている(図11)。ここ数年、参拝客からの浄財等の収入は年間300万元に達した。そのうちの約200万元は海外華僑によるものである。清真禪寺の収入の約半分は、地元の公益事業に使われている(《青田華僑史》編纂委員会編、2011:292-293)。

また、阜山郷西溪坑にはキリスト教の教会(基督教堂)がある(図12)。基督教堂の石碑によると、阜山郷におけるキリスト教の活動は1899年にまで遡ることができる。温州にあるイギリス「聖公会」の宣教師の指導で、阜山郷の中心部に教会が建てられた。信者数は1949年に100人、1957年に400人近くなった。1980年以降、信仰の自由が徐々に認められるのに伴い、本堂のほか、夏家地、下北、西溪坑など12の集落に小さな教堂が新設され、信者数も3,000人に達した。出国者数の増加に伴い、海外華僑と留守家族との精神的なつながりも重要になった。教会は2回の拡張工事が行なわれたが、現在のキリスト教会は、敷地面積



図11 阜山郷の清真禪寺

(2010年8月撮影)



図12 阜山郷の新築家屋とキリスト教会

住民のどの家庭でも海外在留の親族がおり、海外からの送金により建てられたりっぱな住宅が多くみられる。(2010年8月撮影)

は536㎡、建築面積は1,976㎡で、2007年7月に竣工したものである。

(3) 仁庄鎮の事例

仁庄鎮は青田県の南西部に位置し、青田県の県城、鶴城鎮から18kmのところにある山間の町である(図2参照)。甌江の支流は県の南西から北東へ流れて、甌江に注ぐ。省道57号線は、その支流に並行して鶴城鎮に至る。河川沿いの若干の集落を除けば、ほとんどの集落は山間部に立地している。仁庄鎮の総面積は97km²で、そのうち山林が68.9%を占め、耕地面積はわずか7.6%である。2007年末の人口は19,967人である(中共仁庄鎮委員会・仁庄鎮人民政府, 2008:1)。1人あたりの耕地面積はわずか3.37aで、水稻、漢方薬の五加皮、果樹、野菜などを生産している。また、前述した「田魚」が行なわれ、水田と集落周辺の池や用水路では、鯉を品種改良した魚が養殖されている(孫・関・成, 2008)。

仁庄鎮では、貧しい生活を補うため、古くから多くの人々が海外に渡り、現在では約2万人の仁庄鎮出身者が世界50カ国・地域に分布しており、青田県の中でも、仁庄鎮は特に代表的な僑郷の一つである。前述したように仁庄鎮は日本在留の老華僑を多く送出した地域であり、著名な実業家である林三漁やプロ野球の名選手であった王貞治の父、王仕福の出身地でもある。

表5および図13は仁庄鎮における村別の人口および海外在留者数(中国語では「外出人口」とよばれる)と耕地面積を示したものである。これによれば、2007年における仁庄鎮の人口の約50%が海外に在留している。村別にみると、周辺山間部の交通条件の悪い村からの海外流出者が多いことがわかる。例えば、村の人口の70%以上が海外在留者である村は、孫山村(81.4%)、塘古村(77.1%)、夏巖村(74.9%)などである。また、仁

庄鎮では1戸あたり1.48人が海外在留者である。1戸あたりの海外在留者が多い順にみていくと、塘古村(2.47人)、夏巖村(2.44人)、孫山村(2.35人)、横培村(2.18人)、林山村(2.04人)、応庄垌村(2.01人)、小令村(2.00人)となっている。これらの村は応庄垌村を除けば、幹線道路である省道57号線から離れた村である。また、表5の村別の海外在留者の絶対数をみると、仁庄鎮の北西部の山中に位置する小令村が1,235人で最も多くの海外在留者を送出している。

2. 都市部の変容

(1) 県城、鶴城鎮の変容

唐の時代の711年に県制が採用されて以来、青田県の行政機関所在地は鶴城鎮に置かれてきた。県城である鶴城鎮には、1949年まで11本の細い路地しかなかった。しかし、今日では、南北11本と東西18本の道路で構成され、甌江に沿って市街地が带状に拡大してきた。特に1990年代に入ってから、甌江に新しい橋が建設され、交通が便利になるとともに、甌江南岸でも新しい開発が進んできた。鶴城鎮の人口の変化をみると、1949年には8,300人であったが、2006年にはその約10倍の82,200人に増加した(青田県建設誌編纂委員会編, 2003:図14)。なお、1992年、行政区画の改正によって、前倉郷と外旦郷、金田郷、湖邊郷の4郷が鎮に編入され、人口が5万人を超えた。同様に、2002年1月に油竹郷の11行政村の編入により鎮の人口が6万人以上に上った。このように、都市開発による人口増加のほかに、行政区画による範囲の拡大も人口増加の一つの要因となった。

図15は、鶴城鎮の市街地の今日の概要を示したものである。民国期、甌江の水運は人的・物的な移動のために重要な役割を果たしていた。大埠頭、上店街、大街一帯には、旅館などの宿泊施設が分布し、飲食店は主に大街、大埠頭、金巷口な

表5 仁庄鎮における村別の海外在留者と耕地面積（2007年）

	戸数 (戸)	人口 (人)	海外在留 者数 (人)	人口に占 める海外 在留者数 %	1戸当 たりの海外 在留者数 (人)	耕地面積 (ha)	1人当 たりの耕地 面積 (a)
仁庄村 ^D	1,495	4,210	485	11.5%	1.88	106.83	2.54
新彭村	231	708	314	44.4	1.36	28.00	3.95
馮村	298	927	318	34.3	1.07	24.70	2.66
羅溪村	272	856	523	61.1	1.92	29.53	3.45
林山村	171	560	348	62.1	2.04	24.60	4.39
呉岸村	259	697	224	32.1	0.86	18.60	2.67
応庄垵村	370	1089	745	68.4	2.01	27.40	2.52
塘古村	208	665	513	77.1	2.47	27.27	4.10
雅林村	253	754	288	38.2	1.14	22.27	2.95
八源村	193	568	326	57.4	1.69	11.53	2.03
横培村	79	249	172	69.1	2.18	12.07	4.85
垵心村	409	1,280	647	50.5	1.58	59.13	4.62
東垵村	309	929	609	65.6	1.97	44.60	4.80
夏巖村	317	1,034	774	74.9	2.44	39.33	3.80
蓮頭村	253	820	490	59.8	1.94	26.27	3.20
垵坑村	139	468	264	56.4	1.90	13.13	2.81
小令村	619	1,833	1,235	67.4	2.00	61.80	3.37
石礮村	352	992	645	65.0	1.83	40.53	4.09
南木宕村	189	564	346	61.3	1.83	18.67	3.31
孫山村	265	764	622	81.4	2.35	37.53	4.91
合計	6,681	19,967	9,888	49.5	1.48	673.79	3.37

注1) 仁庄村に一居委、二居委、および三居委のデータが含まれている。

(中共仁庄鎮委員会・仁庄鎮人民政府(2008:2)による)

どの繁華街に分布していた。横街、大街、上店街
 一帯は商店が軒を連ねる繁華街であった。民国期
 には電器会社、印刷所などの会社が鶴城鎮に設立
 され、縫製、紡績などの機械が生産された。多い
 時には30種あまりの手工業が鶴城鎮内で生産活
 動を行っていた。1949年に中華人民共和国が
 成立するまでの市街地は、現在の市街地の西部に
 位置する横街、上店街、大街、宝幢街に沿って分
 布する範囲に限られていた(鶴城鎮誌編纂委員会、
 2009:3-4)。

市街地の構造に大きな変化が現れたのは1950
 年代であった。早期の貨物輸送は水運が中心で
 あった。1934年、麗青温(麗水・青田・温州)道
 路が開通したが、その4年後には日本軍の侵入
 を防ぐため破壊された。1953年、麗青温道路が
 再び開通し、麗水と温州との陸路交通も可能と
 なった。1958年、青田水力発電所の建設とともに、
 大量の人口が転入し、鶴城鎮の人口は1957年
 の10,700人から1958年の22,700人に倍増した。
 1957年に新建嶺路、1959年に新大街と少年宮路、



図13 仁庄鎮における村別の海外在留者数 (2007年)

(中共仁庄鎮委員会・仁庄鎮人民政府 (2008:2) 掲載のデータにもとづき筆者作成)

1980年代までには龍津路、臨江路、鶴城路が建設され、市街地が甌江北岸において徐々に東へと広がった。1990年代に入り、東部には1994年に鳴

山路が、また、1998年に馬鞍山路と塔山路が開通し、市街地は東部に拡大した(鶴城鎮誌編纂委員会, 2009:679)。この時代に、市街地の構造を大きく変えるインフラの整備が行なわれた。すなわち、1995年の甌江大橋と1999年の太鶴大橋の建設である。甌江を跨ぐ橋梁の完成に伴い、甌江の兩岸の往来が便利になり、市街地も甌江南岸に拡大した。さらに、2006年には塔山大橋が完成し、工業団地が東部と南部に建設されるようになった(鶴城鎮誌編纂委員会, 2009:686, 707)。

市街地の構造からみると、市街地の変化は大きに1949年までの民国期, 1949~80年, 1980~2000年, および2000年以降の4期に分けることができる。市街地の構造を変化させたのは、経済活動と住民の需要と考えられる。まず、青田県の経済基盤となる工業について、1970年代末、経済体制改革の実施とともに、民間と個人経営の企業が著しく発展し、工業企業数は1981年に18社, 1987年に85社, 2000年には207社と増加し、業種も25種に及んだ。2001年以来、前述した「華僑要素回流工程」(華僑資源回流プロジェクト)が実施され、石郭と平演(図15参照)で工業団地が建設され、海外の華僑からの投資により青田県の工業発

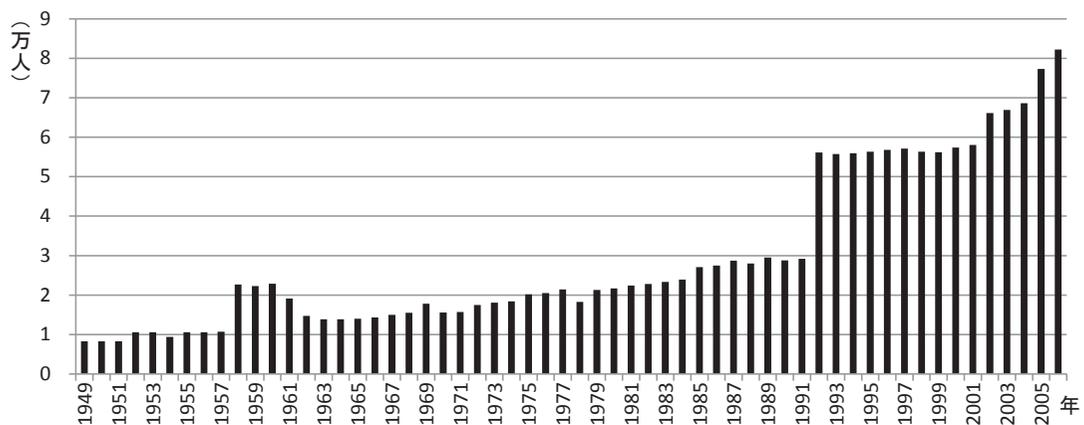


図14 鶴城鎮の人口の変化 (1949~2006年)

(鶴城鎮誌編纂委員会 (2009) により筆者作成)

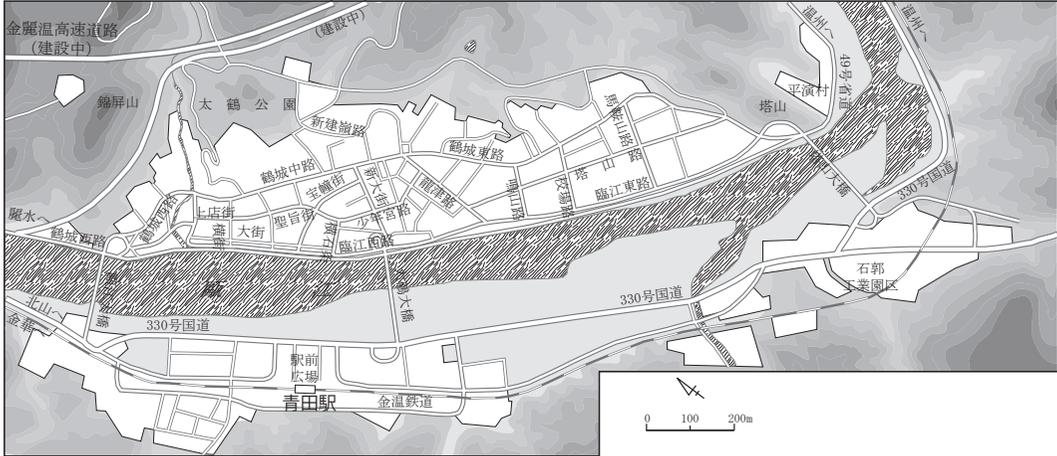


図15 鶴城鎮の市街地

(筆者作成)

展が促進された。さらに、2001年に青田県は温台経済圏（温州と温州の北東部に位置する台州を指す。図1参照）に加入してから、対外貿易が台頭し、同年4月に「麗水市工業強鎮」（工業が発展した鎮）と命名されるほど工業が著しい発展を遂げた。2006年、民間と個人経営の企業数が608社まで増加し、うち独資企業（外国資本100%の現地法人）25社、合弁企業9社、民間有限会社222社、個人経営企業352となっていた。2008年、鎮の工業生産高は5.8億元まで上昇した（鶴城鎮誌編纂委員会、2009：4）。

次いで、1980年代に入ってから、個人経営の合法化に伴い、商業活動の活発化も市街地の構造を変える一因となった。商店数も増加し、2006年には2,415軒になった。商圈の中心も市街地の変化に伴い西から東へ移動した。宿泊施設は1949年に十数軒しかなかったものが、1990年代後半には、四つ星1軒、三つ星2軒、二つ星3軒など星付きホテルが現れ始めた。2006年には、宿泊施設が100軒を超え、飲食店も268軒まで急増した（鶴城鎮誌編纂委員会、2009：385）。

住民の生活様式と都市景観に対する意識の変化

も、市街地の構造に変化をもたらしたと考えられる。2000年以降、スーパーマーケットなど大型商業施設が青田県にも進出し、加えて、住民の余暇活動の需要、都市景観としてのランドマーク的な存在等の要因もあり、市街地には大型広場が建設された。まず、2002年に甌江南岸に建設された青田駅の完成とともに、敷地面積1.35haの駅前広場が建設された。つづいて、2005年に龍津公園広場（1.30ha）、2006年に聖旨街広場（0.25ha）、2007年に劉基広場（1.5ha）が建設された（鶴城鎮誌編纂委員会、2009：697）。

(2) 僑郷の都市空間

2010年8月に鶴城鎮において、外国文化または海外出国に関連する施設を対象に現地調査を実施した。図16は鶴城鎮における店舗の分布と業種構成を示したものである。総店舗数45軒の内訳をみると、洋食店23軒、出国書類作成7軒、金融・外貨5軒、出国技能学習3軒、ホテル3軒、旅行2軒、サービス・その他2軒となっていた。西洋レストランはいずれも維也納（ウィーン）、夏威夷（ハワイ）、巴塞羅那（バルセロナ）など外国の地



図16 鶴城鎮の市街地における海外関係店舗の分布

(2010年8月の現地調査により筆者作成)

名を店名に用いたものが多く、「美食・咖啡」の看板を掲げるものが目立つ(図17)。

次に、鶴城鎮において飲食店が非常に多い背景について考察する。

まず、海外の青田人の居住地と海外での職業構成が大きく影響していると考えられる。海外在留の青田人の職業構成をみると、1960~80年代、海外在留の青田人で飲食業に従事するのが21,000人で、全体の70%を占めた(《青田華僑史》編纂委員会編, 2011: 112-113)。1980年および1986年に実施された海外在留の青田人6,604人を対象とした調査では、飲食業従事者が2,621人で全体の39.4%まで低下したものの、依然として最多であった(青田県誌編纂委員会, 1990: 647)。

次いで、「コーヒー(咖啡)」店が多く存在する理由は、海外の青田人の居住地との関係が深いと考えられる。1987年の統計によると、海外在留の青田人20,030人のうち、ヨーロッパ在留者が17,750人で全体の88.6%を占めた(青田県誌編纂委員会, 1990: 646)。また、張(2005)の研究によると、ヨーロッパ在留の青田人の海外在留者総数

の割合は89.7%まで増加した。これを反映して、鶴城鎮の飲食店の中には、コーヒー、ワイン、生



図17 店名に「バルセロナ(巴塞羅那)」を冠した西洋レストラン

西洋レストランの店名には、多数の青田人が在留しているヨーロッパの地名が用いられることが多い。ほとんどの西洋レストランの看板には、「咖啡」(コーヒー)や「美食」(グルメ)の文字が書かれている。

(2010年8月撮影)

ハム、ピザ、ステーキ、パスタなどの洋食を提供する店の割合が多い。

さらに、鶴城鎮において飲食店が発達する現象は、青田県の都市機能の特色と関連がある。海外在留の青田人による中国国内への投資は多いものの、出身地である青田県への1人あたりの投資額は、浙江省における海外華僑が出身地に対する投資額平均値の1割にすぎない。海外在留の青田人の国内投資先は、北は黒龍江省、西は新疆ウイグル族自治区、東は上海まで投資範囲が広がっている。例えば、浙江省の省都、杭州における不動産投資だけでも約1億元、安徽省池州市には海外在留の青田人の投資会社が9軒もある。2004年には、海外在留の青田人が青田県以外に100億元を投資し、故郷である青田県に投資した額の5倍あまり

となった(青田華僑史編写組2010:169)。海外華僑の投資先から、中国における青田県の位置付けと、青田県の都市としての特色がわかる。青田県の中心市街地のように、人口が10万人以下の都市は、中国では小都市に位置付けられ、あくまでも周辺農村地域にとっての中心的な存在にすぎない。近隣の温州市および麗水市と比べると、青田県は都市機能が乏しい。そのため、海外在留の青田人の故郷である青田県への投資は不動産のほかは、地元住民が必要とされる飲食業に集中する傾向が著しくなる。加えて、毎年、数多くの海外華僑が帰省し、接待などで宴会を行なう需要が多いことが、飲食業の成長を促す要因となっている。

僑郷ならではの特色として、出国手続代行会社(図18)が、鶴城鎮の市街地で7軒がみられた。文



図18 出国手続代行会社

この会社では、ビザ取得代行、公認書作成、書類翻訳、航空券販売などのサービスを行なっている。窓ガラスには、スペイン(西班牙)、イタリア、ポルトガル、オーストリア、ドイツ、フランス、オランダ、チェコ、ブラジルなど新華僑に人気の出国先が書かれている。(2010年8月撮影)

化大革命が終わると、早くも1977年10月、青田県は公認処を設立し、フランス、オランダ、イタリア、スペインなど24カ国に在留している華僑およびその親族のために、出生、親族関係、婚姻など26種類の涉外公認書類を作成する業務を始めた。また、翌1978年には、出国規制が緩和され、出国者数が増加した。1992年、青田県帰国華僑聯合会が認証サービス会社を設立して以降、2001年までに6軒の同様の認証サービス会社が設立され、パスポートの取得、公認書類の作成、翻訳、航空券の販売が民間会社でも可能になった。さらに、2002年12月には私用出国サービス会社が設立され、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、ロシア、イタリア、スペイン、ドイツなどへ行くための親族訪問ビザの代行申請が行なわれるようになった。2007年には認証サービスを提供する会社は15軒あった（鶴城鎮誌編纂委員会、2009：447）。

さらに、海外からの外貨送金と預金、両替業務に欠かせない銀行などの金融機関も5軒あり、また外国人および親族訪問の来客が利用できる星付きホテルが3軒、国際線の航空券を取り扱う旅行会社が2軒ある。中国では中国銀行が外貨両替業務を扱うのが一般的であるが、青田県には中国銀行個人外貨売買センターという外貨両替専用の機関が存在するのも、他の一般的な都市には見られない特色である。

VI おわりに

本研究は、浙江省の主要都市である温州市に隣接し、伝統的な僑郷であった青田県が、新華僑の送出により、僑郷としての特色がいかに変容してきたかについて、現地調査に基づいて考察することを目的とした。

その結果、明らかになったことは、以下のよう
にまとめることができる。

青田県は地形の起伏が大きい山間部に位置し、農地面積が狭く、貧困地帯であった。清朝末期には、特産品である青田石の加工品を販売するために、陸路シベリアを経てヨーロッパに出稼ぎする者も少なくなかった。光緒年間(1875～1908年)には、ヨーロッパよりも日本へ出稼ぎに出る者が増加した。しかし、関東大震災の発生後、日本への出稼ぎの流れは途絶え、青田人の主要な出国先は、ヨーロッパになっていった。

中華人民共和国の成立、その後の文化大革命などにより、青田県からの出国は停滞した。しかし、中国の改革開放政策の進展に伴い、海外渡航者が急増し、青田県では出国ブームが起こった。その主要な渡航先はスペイン、イタリアを中心とするヨーロッパであった。海外在住者からの送金・寄付・投資などにより、青田県の経済は発展した。農村部では建築ラッシュが起り、キリスト教会や診療所なども建てられ、多くの若年層は海外に出て行った。ヨーロッパ在住者やヨーロッパからの帰国者の影響は僑郷の景観にも現れ、特に県城の鶴城鎮の市街地には、スペイン語、イタリア語などの外国語会話学校、出国手続代行会社などが目立ち、西洋レストランやワインを販売する商店も増加した。青田県の一般市民の間でも、ワインやコーヒーを飲む習慣が浸透していった。

しかし、2008年以降、ヨーロッパの経済不安や移民規制の動向、さらにギリシアに端を発したユーロ圏の金融危機は、僑郷である青田県の今後の盛衰に大きな影響を及ぼすものと思われる。

〔付記〕

現地調査の遂行においては、青田県人民政府僑務弁公室、青田県帰国華僑聯合会、青田華僑歴史陳列館、青田僑報社、郷・鎮の華僑関係者・団体などから多大なご協力を得ることができました。心より感謝申し上げます。

本研究は日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究(B)(課題番号21401035、平成21～24年度)「中

国における日本への新華僑の送出システムに関する研究」(研究代表者:山下清海)の成果の報告の一部である。

注

- 1) 青田石は、青田県で産出される石で、学名は葉蠟石(pyrophyllite)という。青田石は印章、鑑賞置物などに加工され、青田石は国内外でもよく知られている。中国大百科全書総編輯委員会『地質学』編輯委員会(1993:599-600)によれば、葉蠟石は蠟石鉱物で、層状ケイ酸塩鉱物の一種である。中国では葉蠟石の産地によって、青田石(浙江省青田産)、寿山石(福建省寿山産)、昌化石(浙江省昌化産)とそれぞれ称されている。青田県の山中には豊富な葉蠟石があり、その埋蔵量は中国の1/4を占めている。多くの青田人が出国する促進要因の一つとなった青田石は、県内の山口・方山・呉岸・双垵・孫山・小令・北山などの僑郷に多く分布している。青田石の彫刻品は、青田県の観光の重要な土産品ともなっている(青田修訂版編委会編, 2010:183-248)。
- 2) この地図はThe University of Texas at Austinのサイト <http://www.lib.utexas.edu/maps/ams/china/> から閲覧できる。
- 3) 青田県方山郷の龍現村では、古くから限られた耕地を有効に利用するために、水田で魚を養殖する「田魚」とよばれる方法が考案され、今日も盛んに行われている。龍現村は「中国田魚村」(田魚の里)とよばれ、「田魚」は2005年5月に国連食糧農業機関(FAO)の世界農業遺産に指定されている。
- 4) 農家楽とは、観光業と農業を結びつけ、農村地域の自然や文化などを観光資源として行われる観光活動である。農産物を産出する伝統的農業と異なり、付加価値が高いため、立ち遅れている農村地域の経済振興策として、中国では注目されている。初期の農家楽は農家料理を食べさせるのが一般的であったが、発展に伴って、農村観光、マージャンなどの娯楽、農家料理の飲食、民家宿泊、農作業体験など様々な形態がある。地域の特色ある農林水産業に依拠しているため、農家楽、漁家楽、牧家楽などの名称もある。また、少数民族地域では、傣族による傣家楽、苗族による苗家楽などもある。
- 5) 「別荘」とは、本来、郊外あるいは保養地などの高級住宅を意味したが、今日では、庭つきの一戸建て高級住宅を指す場合が多い。
- 6) 留守児童とは、両親あるいは片方の親が都市へ出稼ぎに行き、郷里に残った児童のことをいう。彼らは片方の親か、祖父母や両親の親戚とともに暮らして

いる。1980年代の改革開放の進展に伴い、大量の農民が都市へ出稼ぎに行き、農村部では留守児童が増え、彼らの養育問題、教育問題などが大きな社会問題として認識されるようになった。青田県の場合は、児童の両親は中国国内の都市ではなく、海外に在留するため、通常の留守児童の事情と若干異なる。小学校の高学年になると、親が在留している国へ渡航する例が多い。

文献

- 阿部康久(1999):1920年代の東京府における中国人労働者の就業構造と居住分化。人文地理, 51(1), 23-48.
- 今井清一(1993):関東大震災下の中国人虐殺事件が明らかにされるまで-資料の所在・発掘および調査の経過と二三の問題点-。湘南国際女子短期大学紀要, 1, 31-59.
- 鈴木洋史(1999):『百年目の帰郷』小学館。
- 仁木ふみ子(1991):『関東大震災中国人大虐殺』岩波書店。
- 仁木ふみ子編(2008):『関東大震災下の中国人虐殺事件:史料集』明石書店。
- 山下清海(2002):『東南アジア華人社会と中国僑郷—華人・チャイナタウンの人文地理学的考察—』古今書院。
- 山下清海(2007):ブラジル・サンパウロ—東洋街の変容と中国新移民の増加—。華僑華人研究, 4, 81-98.
- 山下清海・小木裕文・松村公明・張貴民・杜国慶(2010):福建省福清出身の在日新華僑とその僑郷。地理空間, 3(1), 1-23.
- Thunø, Mette(1998): Chinese in Denmark. Benton, George and Pieke, Frank N. eds.: *The Chinese in Europe*. Macmillan Press, London, 168-196.
- Live, Yu-Sion(1998): The Chinese community in France: Immigration, economic activity, cultural organization and representations. Benton, George and Pieke, Frank N. eds.: *The Chinese in Europe*. Macmillan Press, London, 96-124.
- [中国語文献(著者のピンイン順)]
- 曹敏(2009):外資引進中的華僑華人作用, 問題, 変化と対策。世界經濟与政治論壇, 4, 39-44.
- 陳慕榕主編(1990):『青田県志』浙江人民出版社, 杭州。
- 董秉弟編(1997):『風雲人物傳』東方出版社, 北京。
- 方山郷志編纂委員会編(2004):『方山郷志』方志出版社, 北京。
- 高曉潔・吳玉鑫(2002):跨国移民—来自僑郷青田的研究報告。社会, 11, 4-9.
- 郭秉強(2007):青田人移民巴西及其創業史。周望林主

- 編『華僑華人研究論叢 第7輯』中國華僑出版社, 北京, 128-129.
- 郭劍波·陳紅麗(2009): 青田華僑華人与中欧文化交流. 八桂僑刊, 4, 47-52.
- 鶴城鎮誌編纂委員會編(2009): 『鶴城鎮誌』浙江人民出版社, 杭州.
- 李明歡(2002): 『歐洲華僑華人史』: 中國華僑出版社, 北京.
- 留伯仙編(2005): 『青田古人名人錄』國際炎黃文化出版社, 香港.
- 劉瑩(2009a): 浙南跨國移民潮的歷史變遷. 南洋問題研究, 2009年第1期, 66-73
- 劉瑩(2009b): 移民網絡与僑鄉跨國移民分析—以青田人移民歐洲為例. 華僑華人歷史研究, 2009年第2期, 27-35
- 劉瑩(2009c): 浙南僑鄉社會的歷史變遷. 世界華僑華人研究, 第二輯, 213-224.
- 喬衛·刁壽(2010): 『中國僑鄉僑情調查』中國國際廣播出版社, 北京.
- 青田縣年鑑2009年 <http://www.qingtian.gov.cn/zjqt/qtnj/> (最終閱覽日: 2012年3月31日).
- 青田華僑史編寫組編(2007): 『青田華僑史(徵詢稿)』青田華僑史編寫組, 青田.
- 《青田華僑史》編纂委員會編(2011): 『青田華僑史』浙江人民出版社, 杭州.
- 青田農業信息網(青田農學院) <http://www.qtnw.gov.cn/> (最終閱覽日: 2011年1月4日).
- 青田人文風情 <http://0086zj.com/qingtian/fsxgkqh.html> (最終閱覽日: 2012年3月31日)
- 青田縣人民政府「中國·青田」 <http://www.qingtian.gov.cn/> (最終閱覽日: 2012年3月31日)
- 青田修訂版編委會編(2010): 『青田』中國華僑出版社, 北京.
- 青田縣建設誌編纂委員會編(2003): 『青田縣建設誌』青田縣建設誌編纂委員會, 青田縣.
- 青田縣誌編纂委員會編(1990): 『青田縣誌』浙江人民出版社, 杭州.
- 丘立本(2007): 國際移民趨勢, 學術前沿動向与華僑華人研究. 華僑華人歷史研究, 3, 1-6.
- 任幸芳(2005): 論僑資与僑鄉青田經濟的發展. 麗水學院學報, 27(3), 15-18.
- 潘正研(2009): 依托華僑大力發展「海外青田人」經濟. 政策瞭望, 8, 32-33.
- 孫業紅·閔慶文·成魁(2008): 「稻魚共生系統」全球重要農業文化遺產價值研究. 中國生態農業學報, 16(4), 991-994.
- 《溫州華僑史》編纂委員會編(1999): 『溫州華僑史』今日中國出版社, 北京.
- 王春光(2000): 『巴黎的溫州人—一個移民群體的跨社會建構行動—』江西人民出版社, 南昌.
- 吳潮(2003a): 『浙江籍海外人士』學林出版社, 上海.
- 吳潮(2003b): 浙江鄉僑篇. 黃昆章·張應龍主編『華僑華人与中國僑鄉的現代化』, 中國華僑出版社, 北京, 306-382.
- 吳潮·周望林(2001): 浙江籍海外新移民研究初論. 華僑華人歷史研究, 2001年第3期, 21-26.
- 夏風·王培才(2010): 旅歐麗商對家鄉的經濟「反哺」模式探析. 黑龍江對外經貿, 195, 62-63.
- 徐鶴森(2008): 『民國浙江華僑史』中國社會科學出版社, 北京.
- 葉肖忠(2009): 『華僑八典』中國文化藝術出版社, 香港.
- 張莉(2010): 近代華僑投資与東南沿海地區的社会經濟變遷. 重慶工商業大學學報(社會科學版), 27(4), 60-63.
- 張秀明(1998): 青田人出國的歷史与現狀初探. 華僑華人歷史研究, 3, 48-58.
- 張秀明(2005): 改革開放以來青田人的跨國遷移活動及海外青田人对青田的影響. 東南亞研究, 2005年第3期, 66-71.
- 章志誠(2000): 溫州人移居海外動因, 特点及其歷史貢獻. 周望林主編『華僑華人研究論叢 第4輯』中國華僑出版社, 北京, 75-89.
- 《浙江省華僑志》編纂委員會編(2010): 『浙江省華僑志』浙江古籍出版社, 杭州.
- 浙江省人民政府「浙江省可持續發展規畫綱要2006-03-20」 <http://www.zj.gov.cn/gb/zjnew/node3/node24/node648/node651/node658/node679/userobject9a14979.html> (最終閱覽日: 2012年3月31日)
- 中共仁庄鎮委員會·仁庄鎮人民政府編(2008): 『綠都仁庄』仁庄鎮人民政府, 青田縣仁庄鎮.
- 中國大百科全書總編輯委員會『地質學』編輯委員會(1993): 『中國大百科全書 地質學』中國大百科全書出版社, 北京.
- 中國青田網 <http://qtnews.zjol.com.cn/index.asp> (最終閱覽日: 2012年3月31日)
- 周望林(1997): 青田石雕与青田華僑. 周望林主編『華僑華人研究論叢 第2輯』中國華僑出版社, 北京, 83-88.
- 周望林(2010): 『浙江華僑史』中國華僑出版社, 北京.

**Transformation of the Hometown of Overseas Chinese in Qingtian, Zhejiang Province, China :
From the Hometown of Old Chinese Immigrants in Japan to the Hometown of
New Chinese Immigrants in Europe**

YAMASHITA Kiyomi

Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

OGI Hirofumi

Faculty of International Relations, Ritsumeikan University

ZHANG Guimin

Faculty of Education, Ehime University

DU Guoqing

College of Tourism, Rikkyo University

In China, areas where a large group of local people emigrate abroad are called *Qiaoxiang*, which means the hometown of overseas Chinese. With the implementation of China's economic reform and open-door policy, many traditional hometowns of overseas Chinese have also witnessed great changes and transformation. This research, based on detailed fieldwork, aims to clarify the changing characteristics of Qingtian County in Zhejiang Province. As a traditional hometown of overseas Chinese, this place has seen increasing number of local people emigrating abroad over the years.

The results of the research can be concluded as follows.

Located in a mountainous area, Qiantian was a poor county with few and insufficient agricultural land. At the end of Qing Dynasty, some people began to sell decorations made of Qingtian Stone, a special product of this area, to Europe via a land route passing Siberia. However, during the period of Guangxu (1875-1908) in Qing Dynasty, the number of emigrants to Japan increased and exceeded that to Europe.

With the implementation of reform and open-door policy initiated in 1978, the number of emigrants abroad has increased significantly; Qingtian County is no exception. European countries such as Spain and Italy have become major destinations. As a result, economy has developed rapidly in Qingtian with the remittance, donation and investment from these new emigrants. Infrastructure and building construction has been booming, churches and clinics are built even in rural areas. More and more young people leave their home villages and emigrate abroad. Influence of returnees from European countries can be observed by the landscape of this area, especially in the central business district. Many language schools for Spanish or Italian, as well as labor mediation agencies for immigration procedures were set up. In addition, restaurants of western food and wine shops have flourished the consumption of wine and coffee has become quite popular among the urban residents.

The trend and changes in the economic instability and immigration regulations in European countries will certainly and greatly influence the future of hometowns of overseas Chinese as Qingtian.

Key words : Chinese newcomer, Chinese oldcomer, homeland of overseas Chinese, Zhejiang Province, Qingtian, Wenzhou